



発行 / 認定NPO法人 ランナーズサポート北海道

始まりのこと、これからのこと

スポーツボランティアを宇佐美彰朗さんに聞く

スポーツボランティアのこれからの期待をかける宇佐美彰朗さん



宇佐美 彰朗(うさみ・あきお)さん 1943年新潟県生まれ。中学はバスケットボール、高校は軟式テニス選手で、日本大学入学後から本格的に陸上競技を開始。箱根駅伝などで活躍しメキシコ、ミュンヘン、モントリオールのオリンピックに3大会連続で出場した。日本人で五輪マラソン3大会連続出場は、五輪草創期の金栗四三さん、君原健二さんと宇佐美さんの3人だけ。マラソンベストタイムは1970年の福岡国際マラソンの2時間10分37秒8(当時の日本最高記録、足掛け8年間維持、世界記録3位)。現役引退後には研究者、指導者として東海大学教授、同大学陸上部監督などを歴任。マラソン・長距離に関する著書を多数執筆。現在は東海大学名誉教授。NSVA理事長のほか宇佐美マラソン・スポーツ研究所を主宰し、全国各地でマラソン指導、講演活動をしている。

新型コロナウイルス感染症の影響で、あらゆるスポーツイベントが中止、延期の事態となっています。スポーツボランティアをやろうにも活動場所はない。そんな時だからスポーツボランティアのことをいろいろ考えてみよう、日本スポーツボランティア・アソシエーション(NSVA)理事長の宇佐美彰朗さんにお話を伺いました。宇佐美さんは2000年にNSVAを任意団体として設立、2003年にNPO法人化しました。日本ではスポーツボランティアという言葉がまだ一般化していません。黎明期からこれまでの歩みを振り返り、これからの目指す方向性を語っていただきました。

●大都市の市民マラソンを実現したい

——どうしてスポーツボランティアの名前を付けた団体を設立されたのですか。

現役を引退したあと、東海大陸上部をみているかたわらで、東京のJR新大久保駅に近いスポーツ施設の教室で市民ランナーを指導する機会を持ちました。その教室メンバーの皆さんや心あるランナーとく欧米の大都市では、何万人ものランナーが市街地を走れるマラソンができるのだろうか？日本、とくに東京でもそうした大規模な市民マラソン大会開催ができないだろうか？？>そんな夢を

目次

- 9月6日はスポーツボラ記念日 ③
- スマイル・サポーターズ担当に石井さん ④
- きれいな舗装に一五輪マラソンコース ④

語りあうことが多くありました。

思い浮かんだのが1976年に出場したニューヨークシティマラソンの光景です。多くのランナーが大都会のなかを整然と走っている。それを支えているのが沿道を含めて運営に携わっている多くの人たちでした。

ニューヨークマラソンは1970年、セントラルパークをぐるぐる回るコースに、わずか127人が参加して始まった大会です。私が初出場した76年、米国建国200年の記念年でモントリオール五輪が開かれた年ですが、その年から現在のようにニューヨークの5区全部を巡るコースを設定し外に出ました。その年は道路の端だけを走ること許可されたようでした。一部立体交差のところは階段も使っていました。

そうやって無事に事故なくレースが終わり翌77年、私の現役最後の年です。春のボストンマラソンを走った後、秋に2回目のニューヨークに参加しました。そうすると前年の実績から道路の中央にコーンを置いて半分が使え、とても道路が広いという記憶が残っています。いまでは道路をフルに使い5万人が走っていますよね。

そのころ東京都内では新宿区の都庁から品川区の大井競馬場までを走る「東京シティハーフマラソン」が、都心を走れるので人気がありました（98年で終了）。でもフルマラソンでなくハーフの距離でした。「東京で大規模なマラソンを」という意見を朝日新聞の投稿欄に取り上げてもらったりもして、徐々に賛同してくれる人が増えてきました。

しかし漠然と話し合うたびに「大会を成功するにはボランティアが必要」と思っている、じゃあボランティアはどんなことをして、どうやって育成するんだとなると皆目見当がつかない。そこで、教室のメンバーやラン仲間たちのうち、関心がありそうな人をそれとなく誘って、2000年に日本スポーツボランティア・アソシエーションを立ち上げました。

●手探りでボランティアを考えた

活動は手探りでスタート。研修会の時、実技で皇居の桜田門付近にちょうど良いスペースがあり、700mから800mの距離を走りながら紙コップを取る体験をしよう。そして給水を用意する側はどうすれば取ってもらいやすいかを知る、という具合でしたね。

そのほかにもいろいろやりました。皇居外苑周回歩道や代々木公園などを利用して、東京シティウォークや視覚障がい者の伴走、車いすレースなどを主催したり、運営の協力をしたり。2002年からは、「東京シティロードレース」の障がい者ランナー伴走や大会運営のさまざまなサポート活動もやりました。これらは私の夢の実現の「種まき」でした。

都心部での市民マラソンを望む声は私たちのほかにも、日本財団や多くの市民ランナーから上がっていました。そして2003年、ちょうどNSVAをNPO法人とした年で、石原慎太郎東京都知事（当時）の、銀座などを通る大規模市民マラソン構想打ち上げにつながります。

2007年の第1回東京マラソン大会のボランティア運営

を担ったのは日本財団傘下の笹川スポーツ財団でした。私たちもNSVAのメンバー約60人とともに運営に参画しました。準備万端とはいいがたく、見よう見まねでよく無事に終わったなというのが本音です。それでも2回目、3回目と回を重ねるごとに経験が積み重なり、リーダーとなって新たにリーダー役をつくっていく。なんとか形になったなと思えたのは4、5回大会からですね。

●スポーツ界を引っ張る役割も

——手探りで探しはじめたスポーツボランティアのあるべき姿が見えてきた。

ボランティアを担う人は実にさまざまです。「私はスポーツが嫌いだけどボランティアがやりたいから参加している」というおばちゃんがありました。人に指示するのは苦手ですという人も。これもありですね。ちょっと気になるのは日本人の特性なのかなあ。慣れてくると自分たちの仲間であって新しい人がなかなか入れない雰囲気を出しちゃうグループもいる。これはもったいない。

大きな大会になればなるほど、ボランティアの人数は増える。やはりそこではリーダー役が大切です。いろいろ研修を積んでもらって、言葉遣いや所作のレベルを上げてもらえば組織的なものが円滑にいく。研鑽を重ねて実力をつけたリーダーには、それに見合う対価を考えてもいいかなと思っています。この発想は日本特有ではないでしょうか。

もうひとつ。スポーツボランティアには、イベントでのボランティアだけでなく、それを越えた人材も登場してもらいたいと思っています。競技団体では不祥事がしばしば起こります。最近では体操だ、ボクシングだ、レスリングだと。団体の運営に当たるほとんどがその競技種目出身の指導者。狭い縦割り上下関係の世界です。競技以外の豊富な経験を生かして、「支えるスポーツ」の側からの観点で中立に発言できる人がいて、より開かれた組織に変わっていかなければ。そういう役割を果たす人がスポーツボランティアのなかから登場できるほどに成熟してもらえればと願っています。

●できることから少しずつ

——新型コロナウイルス感染症のためスポーツ競技、スポーツイベントのほとんどが中止です。スポーツボランティアの皆さんにいま伝える言葉は。

誰もが経験したことのない、想像したこともない事態ですね。ようやく緊急事態宣言が解除になって、プロ野球やJリーグなども無観客での再開を準備しています。しかし例えば大規模な市民マラソンを元の通りに復活させるには、たいへん大きな壁がそびえている状態には変わりありません。この壁をすんなりと取り除くマネジメントが示されてほしいところです。

でも、いっきに以前のような姿に戻すことは難しくても、それこそ距離を置きながら、時には時間を置きながらこじんまりしたイベント、競技会、講習会、そうしたことが無事できた。それをテレビや新聞で取り上げてもらう。そうしたことを競技の指導者やイベント運営者が